

目的 本研究は従来より継続してきた被服意匠のための調査研究の一環として実施したものである。今回は、山村の主要な衣服である労働着を対象に、生活との対応において伝統的製作方式（家庭縫製）にみられる衣服意匠に対する人々のとりくみ方について検討を試みたものである。

方法 現地調査を昭和54年8月18日～25日にかけて実施し、面接調査、実態観察をした。

結果 山村の仕事、10月頃から3月頃まで深い雪におおわれる冬期間は藁仕事、衣服製作等の家屋内の仕事に従事し、3月になると山菜とり、畑仕事が始まる。6月頃の種蒔きから10月頃の収穫期迄男女共に縮作、畑仕事、山仕事、養蚕などに追われる他、土木・建築工事現場の労働にも従事している。

労働着、伝統的な労働着はヤマジバン、サラッパカマ、2巾てぬぐい、ふじ笠で構成され、現在でも着装され、ほとんどが家庭縫製されている。この地方の労働着の特徴としてサラッパカマがあげられるが、全国的に普及し既製服化されているモンペとは異なるパターンで構成され、モンペ普及以前から着装されており、労働着として優れた機能性をもっていたこと、冬雪に閉ざされた家内労働を余儀なくされる環境、素材である織物の産地がこの地方の中心地、会津坂下町に存在したこと。衣服はコミュニケーション媒体として重要な役割を果たしているが、山村の生活、労働の共同性に深くかかわりをもっていること等の要因が考えられ、このような状況において、伝統的な生活技術としての家庭縫製が引継がれ、その製作過程の中で意匠的配慮がなされていると考察した。